

令和7年9月30日

静岡県立富士宮北高等学校における柔軟な服装週間の取組 ー「マイコーデウィーク」の実践ー

静岡県立富士宮北高等学校

校長 小谷 和之

目次

1、研究の主旨

2、対象者等

3、研究の内容、方法

- (1) 実践までの経緯
- (2) 取組内容
- (3) 取組中の様子

4、具体的な指導とポイント

- (1) 概要
- (2) 岐阜県立岐阜北高校の教職員アンケートとの比較
- (3) 保護者アンケート

5、研究・実践の成果（生徒アンケート）

- (1) 概要
- (2) アンケート結果（集計結果の貼り付け）
- (3) まとめ

6、今後の課題

1、研究の主旨

静岡県立富士宮北高等学校は、昭和12年、郷土が生んだ稀代の実業家、望月軍四郎が、「地域社会に貢献できる人材を育成したい。」との強い気持ちから、私財を投じて設立した「静岡県大宮商業学校・大宮工業学校」に始まる。その後、静岡県に移管され、今年で創立88年目を迎える学校である。公立の高等学校としては類を見ない自然豊かな広大な敷地に、多くの校舎や運動施設を有しており、充実した学びに取り組める恵まれた環境である。校訓は、「覇気・信念・明朗」であり、創始者が職業人としての人間形成の根幹を願ったこと由来し、現在まで脈々と受け継がれ、学問に、部活動に文武両道に積極的に取り組ませる校風を維持する。

本校のある富士宮市は、市面積が広く、富士山頂上も市域内であり、観光地も多い。さらに富士登山シーズンになると観光客が多く訪れる。富士宮市の産業構造は、2020年国勢調査では、全就業者数63,723人で、その内訳は農林水の第一次産業が3.6%(全国:3.5%)、建設業と鉱工業からなる第二次産業が42.2%(全国:23.7%)、残り54.2%(全国:72.8%)が第三次産業となっている。全国の産業構成と比べると、第二次産業の割合が高いことが特徴といえる。

本校は、普通科3クラス(120人)商業科2クラス(80人)設置し、令和7年度は全校生徒590人である。スクールミッションを「「覇気・信念・明朗」の校訓のもと、地域で活躍する多くの人材を輩出してきた伝統校として、「文武両道」の精神で勉学と部活動に全力で取り組む教育活動や、実践的な商業教育、富士山の恵みを活かした探究学習、地域と連携した国際理解教育などを通して、地域社会の発展に貢献できるグローバルリーダーの育成を目指す。」とする。現在は、「探究的な学習に主体的に取り組み、自分の進路実現を成し遂げる力」や「自分の意見をしっかりと持ち、相手にわかりやすく伝えることができる力」や「「文武両道」の精神で、明るく、前向きに、何事にも積極的に取り組むことができる力」そして、「多様な価値観を受け入れ、国際的な視野を持ち、地域の課題に関心を持って、社会に貢献しようとする力」の育成に力を入れている。

本校の特色は、普通科、商業科の併置校であることに加え、富士特別支援学校富士宮分校を置き、静岡県の示す共生・共育の理念のもと、ともに学び、ともに育つ教育にも取り組むことである。さらには、進路先も就職から進学まで様々な希望に対応している。したがって、地域性も踏まえながら、幅広い視野や生徒に合わせた視座を持ち、多様性を包摂しながら、地元にも有為な人材を育成するのが本校の使命である。

しかし、富士宮市でも人口減少と高齢社会の到来、さらには人口流出が進み、市の中長期的な大きな課題となっている。富士・富士宮地区は、人口推計によると少子化の影響により、高校入学を予定する中学生の数の減少が見込まれ、8年後には現在の約8割となることから、高校の統廃合が富士・富士宮地区のグランドデザインによって示されている。富士宮は、現在4校ある高校を2校にする予定であるが、本校は、前述したように、長き伝統に加え、卒業後に地域に残る生徒の割合も多く、地域の有為な人材を輩出することが求められている学校である。このことは、地元出身教員の多い本校では、強く意識化されている。

このような背景を踏まえ、これから先、本校に求められることは、富士・富士宮地区のグランドデザインで示された地域の人材像「地域を知り、地域に愛着を持ち、地域を革新する人」の具現化、また、地域の課題解決や、グローバルで展開する日本で生き抜いていくためには、生徒は自主的に考え、行動し、責任を持つことが求められる。そこで、本校では、日常の学校生活において生徒の身近にある校則(特に今回は、制服)に焦点を当て、生徒の自主的な行動を促すために、制服を一定期間自由にする期間を設け、制服・私服を選択するなど、自ら服装を考えることとする。この実践を通して、学校生活の中で、一定の自主性は育成できるのかという、意識の変容に焦点を当てて研究したいと考えた。

校則の見直し等を含めた生徒の自主的な活動を促す研究は、先行研究が数多くなされている。

管公(KANKO)学生服株式会社は、全国の高校生(1,099人)に対して、『高校生が考える「学校制服の必要性」に関する調査』(2021年6月)を実施している

(結果公開 URL: <https://kanko-gakuseifuku.co.jp/media/homeroom/vol190>)。

その結果によれば、学校制服の良い点は、「毎日の服装に悩まなくていい」(58.3%)、「学生らしく見える」(56.0%)、「どこの学校か一目でわかる」(34.8%)、「服装による個人差がでなくていい(平等である)」(30.9%)、「冠婚葬祭にも着られる」(29.3%)、「きちんとした気分になる」(25.9%)、「公私のけじめがつく」(23.9%)などと多くの高校生は、学校制服を高校生として肯定的に感じている。また、同調査においても、学校制服の必要性は、約8割の高校生が学校制服は必要だと回答し、さらに女子は「あったほうがいい」と「どちらかと言えば、あったほうがいい」をあわせると、86.4%が学校制服を必要と回答している。

しかし、西倉(2022)は、「ルッキズム」(外見にもとづく差別)という観点から、外見校則がはらむ問題を検討している。ルッキズムは、2000年代以降に学術研究がなされるようになり、1つは、本来はその場面に関係がないにもかかわらず、外見が評価されていること、また、もう1つは、私たちの社会で価値が置かれる外見は、ある偏りを含んでおり、それゆえ特定の人々が不利になることを問題にすることという2つの論点が提示されている。特に、校則による制服着用の指導などは、前者で考えられる。例えば、「外見にかまけていると学業がおろそかになる」という指導や、「校則(制服着用に関する)に従わない生徒がいると集団の秩序が乱れる」とし、放置すると不公平感が抱かれたり、いじめが起きたりする恐れがあるなど、学校における学習等と重要な関係があるという考えのもと指導が行われる。この点を西倉は、恐れに対するリスク回避が正当化され、正しいか否かを判断しないことを教育に持ち込むこと、学習と本来関係のないことでの評価により、公正さが失われることで意欲を失わせること、「らしさ」という価値判断を押し付けることを問題視している。

また、福島(2022)は、「校則を遵守するための経済的負担」として、制服などの購入費の経済的ふたんを負わせるのは「子どもの貧困」の問題を家庭に押し付け、子どもの教育を受ける権利を侵害すると問題点を指摘する。この点は、義務教育段階での議論であるが、経済格差の問題は、高校段階でも今後さらに顕著に表れる可能性がある。そして、これらを内田(2022)は、制服などを象徴とし、校則緩和で風紀は乱れるのか、生徒指導は増えるのかという点を教師の目線と生徒の目線から検証し、実際には、生徒の目線からは、そのような風紀の乱れやルールを破ろうという意識は生まれていないことを明らかにしている(以上、西倉。福島は、『だれが校則を決めるのか 民主主義と学校』(内田良・山本宏樹編2022 岩波書店による)。

さらに、県立高校による実践として、岐阜県立岐阜北高校は、スクールポリシー「荒野を拓く探究人」のもと、夏期服装選択期間を設け、自ら制服の議論を行なっている。

(岐阜県立岐阜北高校 <https://school.gifu-net.ed.jp/wordpress/gifukita-hs/2022/11/30/服装アンケート結果&冬期服装選択制への移行に/>)。その取組により、「今後の岐阜北高校の服装規定についてどう思うか」を議論し、「半年間の服装選択制はおおむね評価されている取り組みだとして前向きに捉える」とともに、僅差であった「年間を通じた選択制」等を含め今後も北高の服装のあり方について考えるという結論を導き出している。

このような先行研究を参考とし、特に、岐阜北高校のアンケート結果や取組を元にして、研究を進める。

この研究を進める上で、本校では、現在、地域のランドデザインが示されたこと等を踏まえ、学校のランドデザイン、学校経営計画書で示すグラドウエーションポリシーを(つけたい力)を見直している。そのきっかけとして、教職員に対して、生徒指導提要の改訂を示した。

令和4年12月に改訂された生徒指導提要では、生徒指導を「社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長する発達する過程を支える教育活動のこと」と定義している。そのため、各学校においては、「生徒一人一人の個性の発見と良さや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えること」を目的とすることで「自己指導能力」を身に付けさせるよう示された。

本校は、生徒のキャリア形成では、高校卒業後に就職を選択したり、職業を意識した専門学校などに進学したりする生徒が多い。そのため、卒業後の地元企業(地域の中小企業等からの要望)や、富士宮の伝統的な気

質の残る地域社会を意識し、規範意識や遵法意識を強く持たせるよう、生徒指導を行なってきた。しかし、本来は、このような地方都市こそ、イノベーションやゲームチェンジが必要であり、そのような人材を輩出する必要性は高くなっている。そのことを意識すると、これまで以上に、いわゆる、「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」そして、「安全・安心な風土の醸成」といった視点は、学校の基盤とするべきことであり、これこそが、生徒指導提要改訂の重要な要素である。

この点を踏まえると、教職員自らが、生徒指導提要の方向性として示された(1)から(3)を、強く意識した教育活動を行い、学校長はそれを元に学校運営することが必要であると考えている。

- (1) 生徒が自発的・主体的に成長・発達する過程を支える意図でなされる教職員の働きかけ
- (2) 学習指導と生徒指導の一体化
- (3) チーム学校による生徒指導体制の構築

以上のように、制服に関する先行研究や、制服を取り巻く学術論文など数多くあるが、今回、本校では、「制服か、私服か」を選択することを議論したり、「校則の見直し」を生徒に投げかけたりする過程を経たわけではない。また、議論すべき事柄(事件等)が起こったわけではない。しかし、教員の日頃の課題意識が元となり、生徒の実態から、生徒、教職員が日常の当たり前をアップデートすることを目的として、他校での実践をもとに、まずは実践し、そこから得られた知見・経験によって、今後の学校運営を考えることは意味があると考えた。したがって、まずは、「柔軟な服装期間」の試行として、実践し、実践後のアンケートを分析していくことが本校にとっては大切であり、これを研究として進めることとした。

2、対象者等

富士宮北高校全生徒：591人(普通科363人、商業科228人)1年生205人、2年生191人、3年生195人

3、研究の内容、方法

7月2日から23日までの3週間、「柔軟な服装週間(マイコーデウィーク)」とした。(研究期間)

7月24日から8月31日まで、校務システムのアンケート機能を活用して、任意のアンケートを行った。

実践にあたっては、これまでの生徒指導の流れを汲みながら、教師主導で取り組むことにした。研究内容は次に示すが、7月1日期末テスト最終日に全校生徒に対して、生徒課(大勝教諭)が、これまでの制服に係る校則に触れながら、3週間に渡る「マイコーデウィーク」の概要を説明した。登下校と学校生活における服装の判断は生徒に委ねるとし、私服での登校を可能とし、装飾品や髪型規定はこれまで通り、服装は自由、学校側があまりにも華美だと判断した場合に、生徒にその服を選んだ理由を問うた上で、対応を考えるという概要である。

(1) 実践までの経緯

6月の職員会議において「本校の生徒の実態」を教員に聞いた。2~4人のグループを作り、生徒の実態を思いつくままに上げてもらった。ここでは、今後のグランドデザインの再検討のために実施したが、意見では、教職員は、生徒に対して、「素直で人間関係を築きやすい基盤を持ちながら、学習面では「主体的な学力への取組の不足」、行動面では「受け身である。依存が強い。流されやすい。」、進路面では「将来展望の不明確さ」といった課題を抱えているとの意見であった。

多田教諭は、長年、本校を支えてきた生徒指導主任である。教諭は、本校が生徒指導に困難を抱えていた時期(万引き他の非行や地域からの評判等)に学校が一丸となって、学校をよくしてきた過去から、その後厳しく校則遵守などを生徒に求めながら粘り強く生徒指導を行い、全体として悪評判は少なくなり、生徒がおとなしくなっている現在の時期までをよく知っている。その教諭に対して、「生徒の自主的な行動が促すこと」「生徒が伸

び伸びと自らの思いや課題意識で将来を切り拓くこと」を投げかけたところ、「私服登校」のアイデアを実現したいとの申し出があった。多田教諭は、校内で相談し、再度提案するとのことであり、それに対して、生徒支援を担当する生徒課職員で、経験豊富な大勝教諭が即座に反応する。県内、県外の情報収集を行い、本校の教職員、生徒との関係を見据えて、どこまで可能であるかの検討をはじめた。以降、この2名の教諭を軸に進めていくこととなる。

本校は、3割程度就職を希望し、キャリア形成上、高校卒業後、社会に出ることを考える生徒が多く、社会の「ルール」という枠組みを強く意識する。そのため、教職員の意識に、地元の中小企業や、これまでの地域の大人からの要望が強く反映されている。また、18歳成人年齢（主権者）となった社会では、大人として扱われる最後の学校教育現場としての責任を感じることもある。一方で、学校長としては、VUCAと言われるこの時代に、これからの生徒には、自ら課題を考えて、それを解決しようと、主体的に行動するマインドをつけていてもらいたいと考えている。そのために、「生徒エージェンシーと言われる「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動すること」を身につけてほしい。」と教職員にはお願いした。教職員は、社会との接点への意識が強く働くことで、多くの者が新たなマインドが必要だと認識していても、新たな取組を行いにくい。その中で、生徒指導を担当する2名の教員のアイデアと、全職員に対するリーダーシップは、教職員に様々な思いはありつつも、一丸となって何かに取り組む経験に繋がり、それを通して、（私も含め）教職員が自ら意識をアップデートしていく萌芽となっていった。

（2）取組内容

時期	内容	具体的な動き等
5月	生徒指導主任と校長面談	私服登校をやりたいとのアイデア
	生徒指導主任の個別情報収集等	教頭や本校内職員と相談
		県内、県外の取組など情報収集
6月9日	生徒指導主任の提案●	「私服期間を設ける」案の提案があり、生徒エージェンシーにも言及
6月中旬	生徒課会議	取組概要の協議、名称案の検討
	生徒会との協議	取組概要の説明、意見聞き取り、名称案の検討
6月17日	運営委員会	取組説明、意見聴取 ※PTA 会長（新旧）、後援会会長に、校長から相談
6月24日	職員会議	取組説明、意見聴取 ※コミュニティスクールにて説明
7月1日	生徒に対する説明	期末テスト最終日に、体育館にて全校生徒に趣旨、取組概要の説明 広報活動（静岡新聞社等の情報提供） ※保護者に対する通知
7月2日～23日まで	My Coordinates Weeks	期末テスト終了日翌日から、各学期終業式前日まで私服期間とする。ただし、式典は正装とする。

●具体的な提案内容「年間（夏期、冬期、春期）で私服期間を設ける」（運営委員会、職員会議）

- ・期間：各学期の期末テスト終了日翌日から、各学期終業式前日まで。ただし、この間の式典は正装とする。
- ・目的：①衣替えを廃止した上で、集会時は正装としてTPOに応じた行動をとることができるよう指導する。その一環として試行的に服装自由期間を実施する。②生徒に既定のルールを守る意識を高めさせる。③よりよい学

校づくりや校則の見直し等に生徒が積極的に参画するきっかけとし、生徒に物事が成就する過程を経験させ、自己肯定感の高揚に繋げる。

規定：服装以外は従来通りとする。

・ネーミング：生徒の主体性を尊重しつつ、TPO を意識した着こなしを促すという意図が伝わるように考え、生徒会と相談する。

＊My Coordinates Weeks (マイコーデウィーク) に決定。My に「自分らしさ」という意味を込める。

Coordinates に「着るモノを組み合わせ調整する着こなし」と説明する。Weeks に「特定の期間である」ことを明確に示しておく。全体の意図として、生徒が主体性を持って TPO を考えて服装を選び、自分らしい着こなしを楽しむ週間というイメージである。

(3) 取組中の様子

7月2日静岡新聞は「暑さ対策私服登校試行」生徒の主体性促す狙いとして、3週間の施行を報道した。また、初日の様子を、「制服で様子見」など周りが気になる生徒の実態を報道し、「いずれ私服にしたいけれど、まずはみんなの対応を見ることにした」「朝、服選びで悩んだ。考えなくて良い制服で落ち着いた」「涼しく登校できた」「周りに合わせるために制服も持ってきた」などさまざまな意見を聞き取っていた。7月9日には、猛暑対策として、「マイコーデウィーク」で暑さ対策として日本テレビ (ZIP) でも取り上げられた。(参照、新聞記事、写真)

4、具体的な指導のポイント等

期間中は、生徒の自主的な行動に対して、細かな指導は行っていない。そこで、実施後のアンケートを元に確認する。

教員に対してアンケート (Google アンケート) を実施した (集計は 7/19~8/5)。回答は 32 人から得ることができた。主な質問項目は、先行事例の岐阜北高校のアンケート内容をもとに作成した。「マイコーデウィーク (柔軟な服装期間) の取組に、どのような意義を感じたか。」「主体性が高まったと感じたか。」「生徒指導提要等が求める自ら考えたり、人権を尊重したりすることにつながっていると思うか。」などを聞き、自由記述にて、「学校生活にふさわしくない服装はどのような服装であったか」なども合わせて求めた。

(1) 概要

教員が高く評価した点とその理由

- ・暑さ対策 (87.5%) : 猛暑における柔軟な服装の効果
- ・主体性の促進 (約 70% が肯定) : 生徒が自ら服装を選択する体験に教育的意義を見出している
- ・規範意識の育成 (約 90% が肯定) : TPO を考える機会になり、校則や公共性を考える良い契機となった
- ・教育的意義 (約 75% が肯定) : 生徒指導提要が掲げる「人権尊重・自律性」に資する取組として評価できる

教員が低めに評価した点・懸念

- ・経済的負担 (約 50% が「少し/大いにつながった」と回答) : 家庭に余計な負担がかかる可能性がある
- ・授業規律 (約 34% が「少し低下した」と回答) : 一部で集中力や規律低下を指摘
- ・服装指導の難しさ: 露出度の高い服装や制服アレンジなど、指摘の基準が曖昧で統一されていない
- ・自由と責任のバランス: 自由な服装が「ルッキズムの助長」に結びつく可能性を懸念する意見

教員の自由記述からの傾向

- ・肯定的意見: 「生徒は思っていたより常識をわきまえていた」「新しい取り組みとしてよかった」
- ・中立的意見: 「期間限定だから良い」「今後の様子を見たい」
- ・否定的意見: 「目的と活動が一致していない」「保護者負担が心配」「規範指導の一貫性に欠ける」

(2) 岐阜県立岐阜北高校の教職員アンケートとの比較

本校と岐阜北高校との比較※質問の太字は、両校の間に違いが見られた質問

質問	本校	岐阜北
学校生活を送る上で規範意識、マナー等自分の行動に責任を持つ意識は変化したか	意識の大きな変化があった1人 まあ意識の変化があった24人 あまり意識の変化はなかった5人 全く意識の変化はない2人	意識が向上した2人 どちらかと言えば向上した6人 どちらかと言えば低下した6人 意識が低下した0人 変化なし25人
学校でふさわしくないと思う服装は見られたか		見られた7人 見られなかった27人
生徒指導提要等が求めることにつながっているか	大いにつながっている5人 まあつながっている24人 あまりつながっていない2人 全くつながっていない1人	
その服装を見た時に指導したか	その場で理由を尋ね、指導した12人 その場で理由を尋ねた5人 その場で治すよう指導した2人 生徒課に伝えた0人 特に何もしなかった13人	その場で声をかけた2人 生徒指導部に伝えた0人 その他教員に伝えた1人 特に何もしなかった5人 未回答
生徒はTPOなどを考えて服装を選択することができたか	そう思う1人 どちらかと言えばそう思う20人 どちらかと言えばそう思わない8人 そう思わない2人 わからない1人	そう思う8人 どちらかと言えばそう思う23人 どちらかと言えばそう思わない3人 そう思わない0人
生徒は衛生面や快適性の面で適した服装を選択できたか	そう思う8人 どちらかと言えばそう思う20人 どちらかと言えばそう思わない3人 そう思わない1人	そう思う23人 どちらかと言えばそう思う11人 どちらかと言えばそう思わない0人 そう思わない0人
生徒は授業に集中して学習することができたか	そう思う4人 どちらかと言えばそう思う15人 どちらかと言えばそう思わない5人 そう思わない0人 変わらない8人	そう思う21人 どちらかと言えばそう思う12人 どちらかと言えばそう思わない1人 そう思わない0人
授業規律が低下したと思うか	そう思う0人(大いに低下) どちらかと言えばそう思う4人(少し低下) どちらかと言えばそう思わない17人 そう思わない11人(全く思わない)	そう思う0人 どちらかと言えばそう思う0人 どちらかと言えばそう思わない11人 そう思わない23人
経済的な負担が増えた懸念があると思うか	そう思う2人(大いにつながる) どちらかと言えばそう思う6人(少し) どちらかと言えばそう思わない16人	そう思う0人 どちらかと言えばそう思う4人 どちらかと言えばそう思わない14人

	そう思わない 8人 （全くない）	そう思わない 16人
本校の服装規定をどう 思うか	年間通して制服着用 3人 限定的な期間で良い 19人 もっと長くしてほしい 6人 通年で私服登校にしてほしい 4人	年間通して制服着用 0人 選択期間を短くする 0人 半年間程度が望ましい 19人 選択期間を長くする 4人 年間通して服装選択が良い 7人

（3）保護者アンケート

保護者に対しても、アンケート（Google アンケート）を実施した（集計は 7/19～8/5）。回答は 274 人から得ることができた。主な質問項目は、先行事例の岐阜北高校のアンケート内容をもとに作成した。「マイコーデウィーク（柔軟な服装期間）の取組に、どのような意義を感じますか。」「主体性が高まったと感じたか。」「家庭としてどのように受け止めたか」などを聞き、自由記述にて、「家庭でどのような話を聞いたか」「感想」なども合わせて求めた。

保護者が肯定的に評価した点

- ・暑さ対策としての意義：制服より快適であり、猛暑の中での安全面・健康面の効果が認められた。
- ・生徒の主体性：自分で服装を選ぶことで「自由と責任」を考えるきっかけになったという声が多い。
- ・自己表現の場：生徒が自分らしさを出せる取組として好意的に受け止められていた。
- ・教育的効果：「多様性の理解」や「人権尊重」を考える契機になる点を評価する意見も見られた。

保護者が懸念・課題として指摘した点

- ・経済的負担：新たに私服を買い足す必要がある家庭があり、出費増加への不安があがった。
- ・服装の範囲や基準の曖昧さ：露出度の高い服装や場面にそぐわない服装を懸念する声があった。
- ・規範意識・ルッキズムへの影響：「見た目での評価が強調されるのではないか」との心配が示された。
- ・学習態度への影響：服装の自由化が気の緩みにつながるのではないかという意見も少数ある。

保護者が生徒に伝えたいこと

- ・「自由には責任が伴う」という姿勢を持つこと
- ・場面や相手に応じて服装を選ぶ「TPO 意識」を身につけること
- ・公共性を意識し、他者を不快にさせない配慮をすること

5、研究・実践の成果（生徒アンケート）

次の方法にて、生徒にアンケートを実施した。

- （1）実施方法：c-learning のアンケート機能
- （2）期間：7月19日～8月中（データは8月28日まで）
- （3）回答：任意（383／595）回収率64%
- （4）設問：生徒課作成（岐阜北高校実施アンケートを提供）、
- （5）フィードバック：8月29日職員会議（生徒記述を含む）今後は、ホームページに公表する予定、2学期末に冬版マイコーデウィークを実施する。

（1）概要

生徒は以下、アンケート結果に示すように、柔軟な服装週間の2、3日は、様子を見ながら、特に運動部の生徒を中心に、ジャージなどで登校する様子が見られた。男子は、猛暑の続く夏の暑さ対策として、ハーフパンツなどの生徒が見られ、徐々に私服での登校が増加した。一方で、制服で登校することの安心感、毎朝コーディネート

を考えずにこられることを優先して制服の生徒も見られた。集計結果からではあるが、学年間でみると、「制服のみ」で登校した割合は、1年生が1番多く、「私服のみ」で登校した割合は、2年生が1番多い。「制服のみ」で過ごした生徒意見としては、「考えるのが面倒」と回答した割合は、1年生が一番多く、「私服が少ない」などの理由は、3年生が1番多かった。2年生は、「ほとんど毎日私服で登校した」割合が1番多かった。

また、私服での学校生活で感じたこととしては、「自分らしさを表現」と答えた生徒は、2年生が一番多く、「暑さ対策」と答えた生徒は各学年50%程度が回答している。「主体性が高まったと感じたかどうか」では、「とてもそう思う」と回答した人数が1番多かったのは、1、2年生であり、「まあそう思う」と回答した人数が1番多かったのは3年生であった。「今後、どうしたいか」を問うた質問では、各学年「もっと長く」、「私服のみ」、「限定的に」が3割程度ずつ分け合った。

(2) アンケート結果 (集計結果の貼り付け)

マイコーデウィークに関するアンケート

匿名回答：匿名 対象学生：全員 生徒：383/595 提出率：64%

7月1日より、生徒の皆さんが主体的に考えてTPOに応じた行動を取ることができるようになるという目的で開始された「マイコーデウィーク」。約1か月という期間が経ちますが、「マイコーデウィーク」について皆さんの考えを教えてください。

設問.1

学年を教えてください。

- 回答 -

番号	回答内容	グラフ	割合	回答数
1	1年		31.1%	119名
2	2年		39.9%	153名
3	3年		29.0%	111名

設問.2

マイコーデウィーク期間中にどのような服装で学校生活を送りましたか？

- 回答 -

番号	回答内容	グラフ	割合	回答数
1	制服のみ		10.4%	40名
2	制服と私服の両方		51.7%	198名
3	私服のみ		37.9%	145名

設問.3

制服のみで学校生活を送った理由を教えてください。

- 回答 -

番号	回答内容	グラフ	割合	回答数
1	学校では制服でいる方が良いと思うから		5.2%	20名
2	私服を見せるのが嫌だから		2.3%	9名
3	私服をあまり持っていないから		6.8%	26名
4	友達と相談した結果		6.3%	24名
5	考えるのが面倒だから		23.8%	91名
6	それ以外		55.6%	213名

設問.4

私服で学校生活を送った期間はどの程度ですか

- 回答 -

番号	回答内容	グラフ	割合	回答数
1	行事など正装の日以外はほとんどすべて私服であった		59.8%	229名
2	週3日程度		18.8%	72名
3	週1日程度		21.4%	82名

設問.5 ※複数回答

私服での学校生活でどんな変化を感じましたか？

- 回答 -

番号	回答内容	グラフ	割合	回答数
https://miyakita.c-learning.jp/t/quest/bent/qb78196565/print				
1/15				

2025/09/13 12:13

Cラーニング（静岡県立富士宮北高等学校/先生）

1	暑さが和らいで快適だった		76.0%	291名
2	自分らしさを表現できた		21.7%	83名
3	服装を考えるのが楽しかった		16.7%	64名
4	逆に服装選びが面倒であった		13.6%	52名
5	周囲の目が気になった		8.1%	31名
6	特に変化はなかった		9.7%	37名
7	その他…選択した理由の欄に入力		8.4%	32名

設問.6

マイコーデウィークを通して「主体性が高まった」と感じるか？

- 回答 -

番号	回答内容	グラフ	割合	回答数
1	とてもそう思う		41.8%	160名
2	まあそう思う		46.0%	176名
3	あまり感じない		10.2%	39名
4	全く感じない		2.1%	8名

設問.7

マイコーデウィークについて、今後どうして欲しいと考えますか？

- 回答 -

番号	回答内容	グラフ	割合	回答数
1	期間をもっと長くして欲しい		34.2%	131名
2	通年で私服での生活を認めてほしい		30.5%	117名
3	今のような限定的な期間でよい		32.1%	123名
4	やめて制服に戻してほしい		1.8%	7名
5	その他…選択した理由を記入の欄へコメント		1.3%	5名

(3) まとめ

今回、「柔軟な服装週間（マイコーデウィーク）」を実施し、生徒が自主的な行動をとる際の様々な選択と実態が見えてきた。制服のみで過ごした生徒は約 10%おり、逆に、私服のみは約 38%であった。制服と私服を併用が約 52%であり、一定の期間内の柔軟な服装の中で、その日その日の状況を確認しながら、自分で考えて服装を選択していることがわかった。私服での登校が徐々に増加したことからも、生徒自らが判断できる心理的な安全性も担保されていたと推察される。私服登校による影響として、最も大きかったポジティブなことは、「暑さが和らいで快適だった」ことである。これは、昨今の猛暑（酷暑）が進む天候を考えれば、成果があった点である。また、「自分らしさを表現できた」と回答した割合も約 22%おり、自分なりに服装を考えて、自主的な行動をとったと解することもできるだろう。さらには、「服装を考えるのが楽しかった」（約 17%）との回答も一定数あり、生徒が学校生活に能動的に取り組むきっかけになっていたことも見て取れる。一方で、ネガティブな影響があったことも忘れてはならない。「服装選びが面倒」に感じた生徒は、約 14%、「周囲の目が気になった」生徒も約 8%いた。いわゆるルッキズムに関しては、学校においては常に生徒の声を聞く体制を持っておかなければならない。

今回、開始するにあたって、生徒エージェンシーに関して触れた。あくまで、アンケート結果であるが、「主体性が高まった」と感じた生徒は88%（とてもそう思う41.8%、まあそう思う46.0%）いたことは、今後さらに研究するきっかけになったと感じている。なぜならば、そう回答したかを聞いた記述の結果を見ると、服装の自己選択が「TPOを考える」「計画的に準備する」といった理由から、その回答を選択しており、その点は、主体性へとつながったと評価できるからである。

6、今後の課題

「柔軟な服装週間（マイコーデウィーク）」の取組に対して、生徒アンケートからは、今後の制度への要望として、「期間をもっと長く」34%、「通年で私服」31%、「今のような限定的期間でよい」32%、「制服に戻してほしい」2%であった。生徒の多くは肯定的に捉えており、特に「夏の快適さ」「自分らしさの表現」「準備の自由さ」を理由としてあげている。一方で「負担感」「周囲の目」「校則全体のあり方」への課題意識も共存されている。

このような結果を踏まえ、本研究（実践）を行う、主旨に戻っておきたい。

この富士宮地区において、本校に求められることは、地域の人材像「地域を知り、地域に愛着を持ち、地域を革新する人」の具現化、また、地域の課題解決や、グローバルで展開する日本で生き抜いていくためには、生徒は自主的に考え、行動し、責任を持つことである。そこで、これまでの教職員の地道な日々の指導の繰り返しから根付いた、教職員と生徒（と、保護者）の信頼関係、人間関係があることから、日常の学校生活において生徒の身近にある校則（特に今回は、制服）に焦点を当てて、生徒の自主的な行動を促す試行的な取組を行った。

この点は、制服を一定期間自由にする期間を設け、制服・私服を選択するなど、自ら服装を考えることを通して、学校生活の中で、一定の自主性は育成できるのかという、意識の変容に焦点を絞ったものであり、一定の成果が見られたと言える。しかし、猛暑対策や、これまでになかった取り組みであり、周囲の状況に合わせたと見られる様子もあった。そのことから、生徒一人一人の自主的な行動を根付かせ、生徒が自ら考えるようになっているかは、今後の取り組みや、秋以降の生徒の様子を見なければ判断はできないだろう。

生徒課を中心に、このマイコーデウィークは、冬期は、生徒にルールメイキングをさせたいと生徒会と協議を始めている。生徒は、自分たちで行った実践を元に、学校全体を巻き込んで、自主的な行動をすることができれば、自己肯定感や自己効力感を上昇させるきっかけとなる可能性がある。それは、今後の本校のあり方を大きく変える一歩にもなりうると感じている。